

帰去来の辞 陶淵明

帰去来辞

帰去来兮。田園将蕪、胡不帰。
既自以心爲形役、奚惆悵而独悲。
悟已往之不諫、知来者之可追。
寔迷途其未遠、覺今是而昨非。

<現代語訳>

帰去来の辞

さあ家に帰ろう。田園は(手入れをしないので草で)荒れようとしている。なぜ帰らないのか(今こそ帰るべきだ)。

これまで、すでに自分の(尊い)心を肉体の奴隷としてきたのだから(=役人となって心を悩ましてきたのだから)、どうして失望してひとり嘆き悲しむことがあろうか。

すでに過ぎ去ったことは諫める方法がないのを悟り、将来のことは追いかけるのを知っている。本当に道に迷った(=間違った方向へ行った)としても、まだ遠く(へは行って)はいなかった。今(役人を辞めて帰るの)が正しい生き方で、昨日まで(の生き方)は間違っていたことを悟ったのである。

陶淵明は、29歳の頃江州祭酒となったのを始めにして、断続的にいくつかの職についているが、義熙元年(405)41歳のとき、彭沢県令になったのを最後に、公職を退いて二度と仕官することはなかった。

「帰去来辞」は、すべての官職を退けて田園に生きる決意を語った詩である。陶淵明の人生の転機を語る詩であり、また田園詩人といわれた陶淵明の面目が遺憾なく発揮されている点で、彼の代表作というにふさわしい作品である。

職を辞するに至るいきさつは、序文の中に記されている。貧しさのために生活の資を得るために仕官したが、己の理想とする生き方に合わず、悶々としているところに、妹の程氏が死んだので、その喪に服することをきっかけにしてにやめたとある。職にあった期間はわずかに80日余りに過ぎなかった。

いつか、私も、帰去来辞を述べて、学校を去る時が来るだろう。それは容易に想像できることである。もっと言えば、来年の今頃は、一日一日が、最後の日まで階段を下りていくような時間であることが今から予想できる。

高校と予備校が決定的に違うところは、卒業生が経済的な資本となるかならないかの違いであると思っている。予備校においては、次なる入学生が新たな資本をもたらす原資となるが、高等学校においては、卒業生こそが、次なる大きな原資となるのである。

だから、10年前の卒業生にも責任があり、50年前の卒業生にも責任が生まれている。その責

任は、学校と当時の教職員が負うが、卒業生自身も大きな責任を負うものである。

それでもしかし、一人一人の卒業生にとって、この学校は帰る郷里であり、帰るところの家である。心のよりどころである。

何度もつらい時には、シャワーを頭からかぶって校歌を歌ったものである。勢い、「われら」はいつもともがらである。「われら」は努め励まなければならない。「われら」は弛んではいけないのである。いつもいつも、その言葉に鼓舞されて、もう一度前を向いてきたのである。

でも、ちょっと辛い時には、戻ってきてください。八幡小路を歩いて右に折れると、坂を下り、また右手に折れると校舎が垣間見えてきます。校庭に吹く風を感じにいつでもいらしてください。

